少年少女のための国民文学

6

# お伽草子

# お伽草子

高木　卓

福村書店刊

1957年6月1日発行
1958年4月25日3版発行

少年少女のための
国民文学⑥
**—お伽草子—**

**定価　280円**

著者　高木卓（たかぎ たく）
東京都杉並区下高井戸2丁目552番地

発行者　福村保
東京都文京区真砂町36番地

印刷者　谷上実
東京都台東区上野山下町2番地

印刷所　弘済印刷株式会社
東京都台東区上野山下町2番地

発行所　東京都文京区真砂町36番地
電話小石川(92)660・4664番
振替口座東京78313番
株式会社 福村書店

## 巻頭の絵巻写真の説明

「福富ぞうし」絵巻　京都春浦院蔵

1　「ああ、くさい、たまらん、――おのれ、こうしてくれるわ」と、ひとびとは、藤太をうちすえます。〔一頁・四頁〕

（本文55ページ）

2　おにばばは、「おのれ、おもいしれっ」と、はしりよって、福富につかみかかります。〔二頁・三頁〕

（本文59ページ）

# まえがき

「お伽草子」は、りくつぬきに、よんでたのしい作品です。

そこの世界では、空をとぶこともできますし、とりやけものと話すこともできます。目もさめるような、うつくしいおひめさまが、まねいてくれるかとおもえば、みるもおそろしいおにが、追っかけてきたりもします。

もちろん、読んでいるとき、いつも心がうきたつとはかぎりません。ときにはさびしく、またかなしくなったり、あるいはハラハラしたり、たまにはしゃくにさわったりもします。

しかし、よみおえると、やはり、りくつぬきにたのしいのです。これこそ、「おとぎぞうし」なればこその世界といえましょう。

「おとぎぞうし」とは、どんな本か。いまの童話とはどうちがうか。それらは、本のおわりの「解説」にゆずるとして、この世界には、なんといろとりどりの花がさき、あこがれも、よろこびも、そうしてなみだも



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あることでしょう。

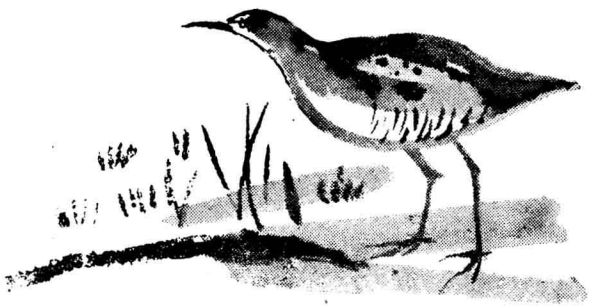
「花世ひめ」は、かわいそうに、おかあさんが、いじのわるいまま母です。「福富ぞうし」の長者は、おならの名人、「ささやき竹」のなまぐさ坊主は、とんでもないたくらみをします。

「ふじぶくろ」では、さるがうつくしいむすめをさらい、「島わたり」の主人公は大ぼうけんをし、「はまぐりひめ」は、りょうしを、あっとおどろかせます。

「ぼんてん国」のわかぎみは、ふしぎな馬でそらをわたり、「白ねずみぞうし」の白ねずみは、かいぬしのゆめまくらにたち、「ものぐさ太郎」のぶしょうぶりには、おだいかんさえも、さじをなげます。

まったく、「おとぎぞうし」の世界では、なんとめずらしいこと、かわったこと、この世にないことが、おもしろく、うつくしく、かなしく、おかしく、くりひろげられることでしょう。

わが国の文学作品のなかでも、「おとぎぞうし」は、たしかに独特な文化財です。なるほど文学としては、正直なところ、高いものとはいえないかもしれない、しかし十五世紀から十七世紀、さらに十八世紀にかけ



て、「おとぎぞうし」は、とおく平安時代の物語文学の脈をひきつつ、数多い作品によって、わが国のあらゆる方面の文学的遺産をとりいれ、ときには外国の説話までうけついで、その点では、貴重な集大成的な手柄さえたてています。

この本は、そういう多彩な「おとぎぞうし」を、少年少女のみなさんが、おもしろくたのしめるように、かきあらためたものです。もとの本は、少年少女よりもむしろ大人のためにかかれたものですから、この本では、みなさんにとって要らないものやおもしろくないものは、すべてはぶき、その一方、たとえばはじめに話の底をわるような、むかしふうのうかつさにたいしては、前後のくばりかたをかえるなど、いろいろ気をつかい、また工夫をしました。

みなさんがわが国の「おとぎぞうし」の存在や意味を、この本によって知ってくださるならば、私としては、これほどうれしいことはありません。

高木卓

# お伽草子目次

花世ひめ……二
福富ぞうし……四八
ささやき竹……六一
ふじぶくろ……九九
島わたり……一一一
はまぐりひめ……一三七
ぽんてん国……一四九
白ねずみ草子……一八三
ものぐさ太郎……二〇四
解説……二三三

# お伽草子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 花世ひめ

ふじ山にちかい山里に、和田盛高という人が住んでいました。

たいへんなおかねもちで、やしきがりっぱなことはいうまでもなく、くらも、いくつもならんでいます。

なに一つ、ふそくのない、けっこうなみぶんでしたが、ただ、こどものないことだけが、この上なく、ものたりないことでした。

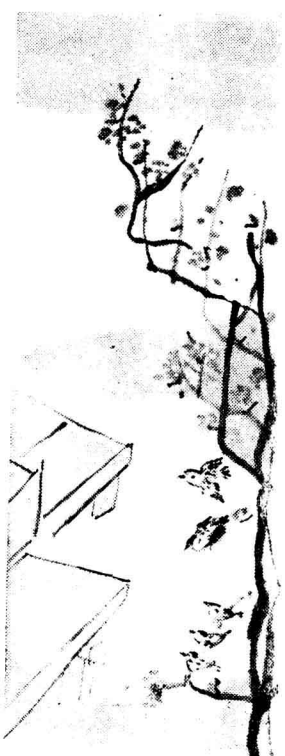
盛高は、しんじんぶかいひとで、かねてから、やしきのなかに持仏堂をつくり、そこに観音さまをまつっていましたが、いつもそのお堂へいって、

「なむ、観世音ぼさつ。どうか、男の子でも、女の子でも、せめてひとりは、おさずけくださいますように」

と、いのりました。

しかし、なぜか、いっこう、ききめがありません。

こどもがほしいという思いは、盛高のおくがたも、もちろんかわりはなく、女だけに一そうねっしんに、かんのんさまにおねがいするのでしたが、やはり、ききめがありません。



きょうも、おくがたは、お堂へいこうとして、へやをでると、にわのうめの木に、すずめどもが、さえずりながら、あそんでいます。

大きいのが二わ、そばの三ばがすこし小さいのは、きっとこどもにちがいありません。五わのすずめは、たのしそうに木のえだを、とびまわるのでした。

おくがたは、

——ああ、すずめのような、とりでさえも、こどもをもって、おやこたのしく、くらしているのに、じぶんたちふうふは、どうしてこどもをめぐまれないのだろう——

と、すっかりかなしくなって、お堂へいくと、なみだをこぼしながら、かんのんさまに、そのかなしいこころを、いくどもいくどもうったえ、とくべつねっしんにいのりました。

そのためでしょうか、おくがたは、その夜、ふしぎなゆめをみたのです。……

ゆめのなかでも、おくがたは、やはりかんのんさまに

おいのりをしているのでしたが、ふと、いいにおいがしたかとおもうと、まるでかんのんさまが、なげてくださったように、うつくしいうめの花が、一つだけ、おくがたのひざのうえに、ふわりと、かるくおちました。おくがたは、その花を手にとってみると、かおりといい、いろといい、なんともいえないすばらしさです。おくがたは、こころからよろこんで、その花を、たもとへいれた、……というところで、ゆめがさめたのでした。

あんまりふしぎなゆめですから、おくがたは、なんとなく、むねがはずんできて、そのままだまっていられず、夫の盛高がねむっているのをおこして、ゆめのことをはなしました。

盛高も、きいておどろきながら、ふかくうなずいて、

「これは、きっとめでたいゆめにちがいない。われわれが、ながいあいだねがっていたのを、かんのんさまが、かわいそうにおもって、とうとうおききとどけくださったのだ。ありがたい、ほんとうにありがたい。

だが、そなたは、ゆめのなかで、そのうめの花を、みぎのたもとへいれたのか、それとも、ひだりのたもとだったか……」

「みぎでございます」

「それでは、うまれてくるのは、女の子であろう。……いずれにしても、たいへんめでたいことだ。こんなうれしいことはない。

さあ、かんのんさまに、おれいもうしあげよう」

と、盛高は、おくがたとともに、そろって手をあわせて、かんのんさまを、ふしおがみながら、ゆめのおつげにたいして、こころから感謝するのでした。

さあ、それからは、盛高も、おくがたも、これまでよりも一そうねっしんに、持仏堂のかんのんさまに、あさゆう、おいのりをささげます。

すると、ふしぎなことに、そのころから、おくがたは、なんとなく、いつもとちがったようなきもちがしてくるのでしたが、月日がたつと、ほんうとにあかちゃんが、おなかのなかにできたことがわかりました。

ふうふとも、すっかりよろこんで、なんというめでた

くありがたいことであろうと、いよいよまごころふかく、かんのんさまにつかえます。

やがて秋がくると、和田盛高のやしきでは、めでたく、玉のようなあかんぼうがうまれました。女の子でした。うめの花のおつげでうまれてきたひめぎみなので、花世姫という名をつけて、ふうふそろって、この上もなくかわいがります。

なにしろ、大がねもちですから、うばやこしもとをはじめ、おつきのひとびとも、よくえらんで、下へもおかないほど、だいじにそだてました。

月日とともに、花世ひめは、たいへんうつくしい、そうして気品もたかい少女になりました。盛高も、おくがたも、大よろこびで、ますますたいせつにかわいがったことは、いうまでもありません。

花世ひめが、九つのときのことです。おくがたは、ふとしたかぜがもとで、おもいびょうきになり、盛高や花世ひめの、こころからの、かんごやいのりのかいもなく、とうとう、あすもしれないいのちになりました。

まくらもとにすわっている夫の盛高にむかって、おくがたは、

「もうたすからないいのちでございます。かねてから、かくごはしておりますから、やすらかにこの世をさることができるとはおもいますが、ただ一つ、こころのこりなのは、花世のことでございます。どうか、この上とも、花世にはよく気をつけてやってくださいますように」

ほそぼそとしたこえで、そういうと、やせたうでをのばして、夫のかたわらの花世ひめをかきよせて、ひめのうつくしい髪をなでながら、

「おかあさまがなくなったら、おとうさまには倍も孝行するのですよ。そなたが大きくなって、りっぱなおむこさんをむかえる日がくるまで、生きていられないことは、ほんとうにざんねんだけれども、あの世でおかあさまは、あなたのしあわせを、心からいのっています。

どうか、だれからもにくまれないような、いいひとになってね。

ばあやたちも、ひめのことは、くれぐれも、よろしく

おねがいしますよ」

いいおわると、おくがたはしずかに目をつぶり、やがてひとびとのなみだのうちに、やすらかにいきをひきとっていきました。

まだ、三十をすぎてまもないわかさだったので、盛高や花世ひめはいうまでもなく、うばやこしもとたちをはじめ、やしきじゅうのひとびとは、だれひとり、おくがたの死を、ふかくなげきかなしまないものはありません。

しかし、やがてかなしいおそうしきもおわり、さらに、忌日々々のいとなみもかさなるうちに、日が、月が、年がすぎていって、花世ひめは、十一になりました。

まえから盛高は、しんるいのひとびとから、あらたにおくがたをむかえるようにと、しばしばすすめられていましたが、とうとうことわりきれなくなったのでしょう、花世ひめが十一の年のくれに、あたらしいおくがたが、やしきに住むことになりました。

しかし盛高は、こんどのおくがたよりも、やはりまえのおくがたがなつかしいらしく、それだけまた、そのおもかげをつたえている花世ひめがかわいくてならないのでしょう、いつもひめばかりかわいがって、あたらしいおくがたのほうへはさっぱりちかよりません。

ひろいやしきで、おくがたのへやは、ずっとはなれているので、花世ひめも、おくがたにはあまりあうことがありませんでしたが、そのころは、こういうふうに、はなれてくらすほうが、ふつうだったのです。

花世ひめは、父のほかに、「ばあや」やこしもとたちもいるので、とくにさびしいとも、おもいませんでした。「ばあや」といっても、まだ中年で、ひめがあかんぼうのころ、おちちをのませてくれたひとです。むかしは、おかねもちや、みぶんのたかいひとのおくがたは、おちちのでるひとを、「めのと」（うば、ばあや）としてやとうのが、ならわしでした。

花世ひめのばあやは、明石というなまえでした。たいへん気だてのいい女でしたが、きのどくなことに夫に死にわかれて、いまでは、じぶんのむすめといっしょに、おやこで、花世ひめにつかえています。明石のむすめ

は、胡蝶といって、やはり気だてがやさしく、そのうえ花世ひめとおないどしだったので、小さいときから、ひめのあそびあいてとして、盛高のやしきへむかえられたのです。

明石と胡蝶のおやこのほか、もうひとり、小侍従というこしもとが、これも花世ひめがまだあかんぼうのころから、ながねんひめにつきそっていました。つまり、ばあやの明石、こしもとの小侍従と胡蝶、この三人が、盛高のやしきでは、いちばん花世ひめにしたしいそうして忠実なひとびとだったのです。そのほか、さらに五人のこしもとたちがいました。

花世ひめが十四になったときのことです。盛高は、あいかわらず、あさゆう、持仏堂へいっては、亡きおくがたの冥福をいのって、おきょうをよむのでしたが、ひとびとのうわさによれば、二どめのおくがたには、ちかごろは、まえよりもいっそうちかづかなくなったそうです。

盛高は、ただ、美しくそだったひめが、かわいくてたまらないというありさまでしたが、あるとき、うばの明石をよんで、あらたまったかおつきになると、

「はやいもので、ひめも、もうことしは十四になった。ついては、そろそろ、むこにむかえるものを、えらばなければならないとおもうが、おまえはどうおもう」

明石は、はっとしたように、みるみる、うれしい感激につつまれて、はやくも目になみだをたたえながら、

「よくぞ、おっしゃってくださいました。おなくなりになったおくさまも、どんなにおよろこびでございましょう」

「そうか。わしもうれしいぞ。ところで、おまえも知ってのとおり、いまのおくは、どうもはじめからわしとは気性があわぬ。……いや、いまさらくりごとなどいうよりも、ひめの身のうえのほうが、たいせつだ。むことりのことは、西の母にそうだんしようとおもうが、どうだろう」

西の母とは、なくなったおくがたの母、すなわち花世ひめのお祖母さんになるひとで、ここから西のほうに一日ばかり旅するところに住んでいるのでした。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com